

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

| | |
|-------------------|-------------------|
| 平成 29 年 10 月 24 日 | |
| 所属部局・職 | 野生動物研究センター・修士課程学生 |
| 氏名 | 岡桃子 |

| |
|--|
| <p>1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)</p> <p>インドネシア ボゴール, ウジュンクロン国立公園</p> |
| <p>2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)</p> <p>第 6 回生物多様性国際ワークショップ</p> |
| <p>3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)</p> <p>平成 29 年 10 月 15 日 ~ 平成 29 年 10 月 22 日 (8 日間)</p> |
| <p>4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)</p> <p>ボゴール農科大学</p> |
| <p>5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)</p> <p>写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。</p> <p>旅程 10/15 関西空港出発, 移動, ボゴールへ 10/16 ボゴール農科大学にてワークショップ (1 日目), ポスター発表 10/17 ボゴール農科大学にてワークショップ (2 日目) 10/18 ボゴールからウジュンクロン国立公園プーチャン島へ移動 10/19 国立公園内のトレッキング 10/20 国立公園内のトレッキング, スムルへ移動 10/21 移動, スカルノ・ハッタ国際空港出発 10/22 帰国</p> <p>海外で行われるワークショップに参加することは私にとって初めてであり, 研究のことだけでなく海外での注意点や持ち物など新しく学ぶことがたくさんあった。また私の研究ではフィールド調査は行っていなかったため, フィールドのトレッキングも新鮮であった。 16, 17 日のボゴール農科大学でのワークショップ (写真 1) では, 各国の研究者の方々の研究発表を聞き, とても興味深かった。私はポスター発表を行ったが, スケジュールの都合であまりディスカッションに時間をとることができなかったことは残念だった。</p> <p>写真 1 ボゴール農科大学セミナー室前にて</p>  <p>18 日はボゴールからスムルまでは車で, そこからプーチャン島まではボートでの 1 日かけた移動であった。都心部に近いと交通渋滞, 田舎になると劣悪な路面状況のため, スムーズに進むことはなかなか難しい。島に着くころには真っ暗で, その日は夕食後すぐに就寝となった。</p> |

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

19, 20 日にかけて、ウジュンクロン国立公園内でエクスカーションを行った。ウジュンクロン国立公園はインドネシア初の国立公園であり、ジャワサイやバンテンなどが生息している。午前、午後とで場所を変えてあちこちトレッキングし、日本とは全く異なる、熱帯林の動植物を観察した。巨大な板根をもった木、着生植物いわゆる絞め殺しの木とよばれる植物（写真2）、マングローブ等々、はじめて見る植物ばかりであった。サバンナではバンテン、森の中ではサイチョウやシカ（写真3）などの動物を見ることができた。絶滅危惧種であるジャワサイ保護区ではサイの姿を見ることはできなかったが、足跡を発見することができた。



写真2 巨大な絞め殺しの木



写真3
シカ



写真4
マングローブ林に
かかる橋

後半の宿泊地では携帯の電波やお湯がなく、そのような場所に行くことは初めてであったため、フィールドワーカーは度々こんな環境（時にはもっと過酷な）で過ごす必要がある。不慣れではあったが最終日には私も水浴びに抵抗がなくなっていた。日を追うごとに体調を崩す人が増え、衛生管理の大切さを改めて感じた。結局一人体調不良のため途中で抜けることになってしまったが、他に大きな事故もなくインドネシアでのワークショップ及びエクスカーションを終えることができてよかったと思う。



写真5

最終日に参加者皆でワークショップの総括を行った
たくさんの人に支えられ、知識を与えてもらった
とても有意義な1週間であった

6. その他（特記事項など）

本出張において、非常に多くの方にお世話になりました。京都大学霊長類研究所 湯本貴和教授、野生動物研究センター 幸島司郎教授をはじめとする同行者の皆様に深く感謝申し上げます。